



カレーダ



カレーダ

川崎ゆき

「カレーだカレーだと言っていたようです」

「食べるカレーですね」

「そうです」

「カレーが好きな人の話ですか。カレーで喜んでいるように見えますが」

「そうじゃなく、これはお芝居でしてね。カレーを食べているシーンなのですが、皿も何もありません。食べている振りをしているのです。カレーを食べている振りをする話じゃないですよ。芝居の中の話とはいえ、カレーを食べていることになっているのです。しかし、皿もないしスプーンもない。だから、説明しているのです。カレーだ、カレーだってね」

「はい状況が分かりました」

「私はそれを見ていて、最初カレーだカレーだの意味が分かりませんでした。あのカレーのことを言っているとは思えなかったからです。しかし、何かを食べていることは分かっていました。このカレーだカレーだは何人もの子供が連呼しています。実際の役者は大人ですが」

「はい」

「耳にはカレーダカレーダと入って来ます。何を叫んでいるのかが分からなくてね。それで、これは枯れ枝ではないかと解釈しました。しかし、家の中で枯れ枝枯れ枝という必要性が何処にあるのか、また枯れ枝はその後出て来ません。カレーもそうです。本当はカレーだったのですが、そのカレーも、この芝居でのキーワードでもなかったようです」

「じゃ、何だったのですか」

「何か食べているってことですよ。しかし、食器なしでやってますから、説明しながら食べていたのでしょうかねえ。それだけです」

「それが何か」

「このお芝居とはまったく関係がないのですが、カレーダカレーダと多数の子供が連呼しているのが印象に残りましたねえ。このシーンでは大した意味はない。もう忘れましたが、久しぶりに食事をしたのでしょうか。または単なる食事シーンだったのかも。そして連呼している子供達は背景のようなものでして、芝居の本筋は手前の人達が進めています」

「所謂食事時の話ですね」

「はい。そして、その説明のため、カレーでも何でもいいんでしょうねえ」

「それも必要な演出だったのではよ」

「いや、黙って後ろでいるより、何か仕草をさせたかったのでしょうかねえ。ひもじいとか、そう言うことでもなく、カレーが珍しいというわけでもなく」

「ほう、それで、その芝居、どんな内容でした」

「難しすぎて、よく分かりませんでした。今思い出せるのはカレーダカレーダだけです」

「ほう」

「私もたまにカレーを作ります。そしていざ食べようとしたとき、カレーダカレーダと思わず口にしたりします」

「凄く印象に残ったのですね」

「そうです。芝居の本筋などとはまったく関係なく」

「はい」

「それで、カレーを見る度に、またはカレーのことを思い出す度に、カレーダカレーダと私も言うてしまうようになりました」

「あ、はい」

「ただし声を出さないで、ですよ」

「はいはい」

了